

# 日本語の接続表現「つつ(も)」構文の 意味・用法について — 逆接を中心として —

金 勝 漢\*

— < 目 次 > —

- 1、はじめに
- 2、「つつ」節の述語
- 3、「～つつ」構文の意味関係
- 4、「つつ」構文と逆接
- 5、「つつも」
- 6、まとめ

## 1、はじめに

日本語の「つつ(も)」は従属節と主節を繋ぎ合わせる働きをする接続表現である。「つつ」構文の意味・用法は、主に動作の同時進行と逆接の二つの意味で使われている<sup>1)</sup>。

(1) はたらきつつ、学校を卒業した。

(基本語用例事典: 637)

(1)のように、「つつ」は前件「はたらく」と、後件「学校を卒業する」を繋ぎ合わせる役割をしている。「つつ」は従属節と主節を繋ぎ合わせる接続助詞のような役割をしていると思われる。

接続表現「つつ」によって、結ばれている前件と後件の関係は、

(2) 一年前の今日十月三日、ベルリンのブランデンブルグ門では花火が打ち

\* 済州大学校 人文大学 日語日文学科 副教授

1) 国立国語研究所(1951)、『現代語の助詞・助動詞 一用例と実例一』、秀英出版、pp70～72

上げられ、世界中の祝福を受けつつ、東西両ドイツの統一が実現した。

(産経新聞「以下、産経」、911003)

(3) 大統領は国内ではさまざまな難題を抱えつつ、国外では笑顔をふりまき続ける。

(毎日新聞「以下、毎日」、950628)

のようになる。(2)は、前件「世界中の祝福をあげる」と、後件「東西両ドイツの統一を実現する」が同時に行われている場合である。つまり、前件と後件の動作が同時進行であることを表している。しかし、(3)は、前件「国内ではさまざまな難題を抱える」と、後件「国外では笑顔をふりまき続ける」が対立していることを示している場合である。つまり、(3)は前件と後件の事柄の関係が逆接であることを表している。

そこで、本稿では、「つつ」構文の意味・用法を再検討し、「つつ」構文が同時進行と逆接に解釈される要因を考察することにする。

## 2、「つつ」節の述語

「つつ」節にあらわれる述語の種類とその形態的特徴は、次のようである。

- (4) 日米自動車問題をめぐる関係折衝が制裁期限ぎりぎりの上増場で合意したことで、二十九日未明の霞が関の関係省庁では、詳細の情報の確認に追われつつも、安どの空気が流れた。(日本経済新聞「以下、日経」、950629)
- (5) 雨は依然として湿原を曇らせつつ、次第に暗くなって行った。(野火、p109)
- (6) 庄九郎は、閉口した。なまじい、この女とは先刻の「縁」がある。あの「縁」がなく、見知らぬ者ならば、庄九郎は法華経を念誦してやりつつ巖落としたであろう。(国盗り物語 一、p61)
- (7) 近く二三日以来の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない。又僕が求めるならやはりどんなことでも民子は決して拒みはしない。そういう間柄でありつつも、飽くまで臆病に飽くまで気の小さな兩人は、嘗て一度も有意味に手などを採ったことはなかった。(野菊の墓、p31)

「つつ」に上接する述語的部分には、(4)の「詳細の情報の確認に追われつつも」のように受け身の「～れる」、(5)の「湿原を曇らせつつ」のように使役の「～せる」、(6)の「法華経を念誦してやりつつ」のようにやりもらいの「～てやる」、(7)の「である」のように判定詞<sup>2)</sup>のような要素があらわれる。つまり、「つつ」は動詞や助動詞「(ら)

2) 渡辺 実(1971)、「国語構文論」、塙書房、p408

れる・(さ)せる」などの連用形に接続する。「ながら」はいろいろな語に接続するが、「つつ」に上統する語は動詞や動詞型の助動詞に限られている。「つつ」の類似語である「ながら」と比べる<sup>3)</sup>と、「つつ」構文の従属節の述語的部分にあらわれる要素には動詞性述語であるという制約がある。

「つつ」節と「ながら」節の述語的部分の要素をまとめてみると、〈表1〉<sup>4)</sup>のようである。

〈表1〉

述語 接続表現	動詞	受動 (ら)れる	使役 (さ)せる	やりもらい てやる	形容詞	判定詞 でやる	否定 ない	名詞	副詞
つつ	○	○	○	○	×	△	×	×	×
ながら	○	○	○	○	○	○	○	○	○

### 3、「～つつ」構文の意味関係

「つつ」構文の意味は、ふつう、同時進行と逆接であると知られているが、その意味関係を詳しく調べてみる。

#### 3.1 同時進行

- (8) ベトナムは九一年に中国との関係を正常化し、東南アジア諸国連合(ASEAN)とも関係強化を図りつつ、積極的な全方位外交を展開している。

(毎日、950430)

(8)では、「つつ」構文の前件の事柄と後件の事柄が同時に行われている。つまり、前件と後件の事柄は同時進行である。同時進行の「つつ」構文は、次のように

3) 「～ながら」に上統する述語的要素の例文は、次のようである。

その他、詳しいことは鈴木忍(1978)と金勝漢(1997)を参照されたい。

- ・ 田中さんは体は小さいながら、なかなか力がある。(形容詞)(基本語用例事典:743)
- ・ 日本は5安打ながら、井口の本塁打などで少ない好機をものにした。(名詞)(朝日、950524)
- ・ その子は、いやいやながら、庭のそじを始めた。(副詞) (横林1993:74)

4) 「つつ」節の述語が判定詞「である」の例文は、(7)のように1例しか見られなかったので、「つつ」の判定詞のところは△にした。

同時進行の意味を示す語句とよくなじむ。

- (9) この中でも注目すべきテーマがホロニック経営の推進である。ホロンとはホロス(全体)とオン(個)との調和・統合を目指す概念である。つまり、個々が自律性を保ち活性化しつつ、同時に全体としても統合されたダイナミズムをもつという意味である。(日経、911006)
- (10) 庄兵衛は喜助の顔をまわりつつ又、「喜助さん」と呼び掛けた。(高瀬舟、p213)
- (11) 銀二郎はそれを延津賀や仙吉から聞いたものに尾鰭を付けてわたしに伝え、わたしはまたそのおおむねをここに記しつつ、併せて仙吉の素性にもふれておこうと思う。(葦手、p19)

「つつ」構文が同時進行を表す場合は、(9～11)のように、「同時に、又、併せて」のような語句を用いることによって、同時進行の意味がもっとはっきりする。

### 3.2 漸次進行

- (12) トルコとビザンチン帝国。東と西。キリスト教とイスラム教。このふたつの文明圏は、今日においても、形を変えつつ新たなドラマを展開しようとしているのだから。(コンスタンティノープルの陥落、p260)
- (13) 局長はけむりの輪がくるくるまわって大きくなりつつ天井へのぼってゆくのを見とどけてから俊介の方へ向きなおった。(パニック、p56)

(12・13)の場合、従属節の述語は、「形を変える・輪が大きくなる」のように、変化を表すものである。(12・13)の「つつ」構文では、前件と後件の事柄の変化がある時間帯の中で徐々に行われている。つまり、従属節の事柄が漸次的に動いていき、それと同時に主節の事柄も漸次的に変化して行くことになる。

- (14) 自分を産んだ女と、自分の子を産む女との間の、べっとりした黒いわだかまりには、カスバル流の剪刀さえ役に立たない。耐えきれなくなったとき男には咆哮があるばかりだった。しかし、彼は次第に医者になりつつ、女たちの争いを見ていた。そして全く一人の医者になったとき、彼には女の争いは見えず聞えなかった。(華岡青洲の妻、p124)
- (15) 雨は依然として湿原を曇らせつつ、次第に暗くなって行った。(野火、p109)

「つつ」構文の意味が漸次進行を表す場合、(14・15)のように、主節または従属節には「次第に」という副詞とよくなじんでいる。「次第に」という語句が従属節または主節に用いられることによって、「つつ」構文の漸次的な意味がより明確になる。

### 3.3 継起

- (16) 光秀は颯爽(さっそう)と若狭へあらわれ、武田家から義秋をひきとり、敦賀湾の海岸線を通りつつ金ヶ崎城に入った。 (国盗り物語 四、p59)

(16)での「つつ」構文の意味は、前件と後件の事柄は、同時進行であるというよりも、継起的な関係であると思われる。

(16)の「つつ」を、「～てから」に置き換えてみると、

- (16) a. 光秀は颯爽(さっそう)と若狭へあらわれ、武田家から義秋をひきとり、敦賀湾の海岸線を通ってから金ヶ崎城に入った。

のようになる。(16)の「つつ」の代わりに、前件と後件が継起的な関係にあることを表す「～てから」に置き換えてみても自然な文になる。

- (17) 光秀は、簡潔にその人柄の様子を語りつつやがて、「お万阿様ほどおもしろい女人はまたとござりませぬな」といった。 (国盗り物語 四、p155)

(17)の「つつ」構文で、従属節と主節の述語はそれぞれ「語る」と「いう」であり、その動作主体も同一である。動作主体「光秀」が従属節の「語る」と主節の「いう」という動作を同時に行うことは、述語の性質上、不可能である。動作主体「光秀」は、前件の動作「簡潔にその人柄の様子を語る」ということを行ってから、後件の動作「お万阿様ほどおもしろい女人はまたとござりませぬな」ということを言うことが出来る。(17)の「つつ」構文で、従属節と主節が継起的な意味関係にあるということは、副詞語句「やがて」によってより明確になる。

### 3.4 逆接

- (18) 国会や地方議会の議員定数の不均衡に対して、裁判所が「違憲」または

「違法」の判断をしめしつつ、有権者からの選挙やり直しの請求をしりぞけるのは、議会自身の手による抜本的是正を期待するからである。

(朝日新聞「以下、朝日」、880920)

- (19) 自伝的小説「あすなろ物語」は、明日は檜になろうと思いつつ、永遠に檜にはなれないという悲しい説話を背負った木に託して、自分自身の半生を劣等感というひとつのモチーフで貫いて小説的に構成したものである。

(あすなろ物語・井上靖 人と作品、p209)

(18・19)では、「裁判所が「違憲」または「違法」の判断をしめたなら、有権者からの選挙やり直しの請求を受け入れる」、「明日は檜になろうと思ったなら、檜になる」のが理の当然であるが、後件の事柄は、それぞれ、「有権者からの選挙やり直しの請求をしりぞける」、「永遠に檜にはなれない」のように、前件の事柄に反する内容になっている。従って、(18・19)の前件と後件の意味関係は逆接である。

- (20) 源氏の心には、あの夜の空蟬のしぐさがまだ、色あせずとどめられている。嘆きつつ、ためいきつきつつ、やさしく執拗にあらがいつつ、それでもついに源氏に抱かれたのであった。

(新源氏物語 中、p43)

- (21) 「あなたのやさしさが、私にとって、かえって仇である」と知りつつ、それでも私は、あなたのやさしさを当てにして、不都合を働いてしまった----源氏は二条院の紫の君あてに手紙をしたためていた。

(新源氏物語 上、p394)

- (22) ----これを売って東京へ行くかと考えるうち、お巡りにひっかかって、交番へ連行され、ものがものだけにいいわけならず、ただ口が裂けても本名だけはあかすまいと、配給通帳はパン屋に置きっぱなしだから、衣料切符を口にはおぼり、嘔みくずして飲みこむ、守口署へ連行される間、その紙の反吐を反芻しつつ、しかし、叔父はすぐに届けたし、モーニングのネームもあったから身許は割れ、これまでも札つきと冷たく証言されて、枚方少年院出張所入り。

(ラ・クンパルシート、p183)

(20～22)での「つつ」構文は逆接を表す例文であるが、「それでも、しかも、しかし」のような接続語句が用いられることによって、前件と後件の意味関係が逆接であることがより明確になる。

このように、「つつ」構文の意味関係は、多くの場合、主に同時進行と逆接であるが、同時進行と逆接以外にも、漸次進行、継起の意味に受け取られる場合があると見えよう。

## 4. 「つつ」構文と逆接

3では、「つつ」構文の前件と後件の間の事柄の意味・用法について検討してみた。「つつ」構文の意味・用法は主として同時進行と逆接であった。この章では、「つつ」構文の意味が逆接に解釈される場合、その逆接の要因について詳しく考察することにする。

### 4.1 意味的対立による逆接

- (23) ロドリゴの背教が、じつは神への裏切りではなく、キリストは棄教者の足で踏まれたつつ、これを赦していたという信仰の畏れるべき逆説は、ばくなど不信の徒のここに沁みいらずにおかない。(沈黙・解説、p255)

(23)では、「棄教者の足で踏まれたなら、これを赦さない」というのが、前件と後件の事柄の間に、一般的に認められた因果関係である。しかし、(23)の例文は、「棄教者の足で踏まれたが、これを赦していた」のように、前件と後件の事柄の間に、一般的に認められた因果関係と合致しないことが生じた逆接表現である<sup>5)</sup>。したがって、(23)のように、前件と後件の事柄が意味的に対立すると、その意味関係は逆接になる。

- (24) (ロシアのシラーエフ首相は)訪日の具体的な成果について、いまのところ政府間協定の準備はしていないとつつ、共同声明を発表することはあり得ると述べた。(朝日、910804)
- (25) エリツィン政権内では、ハズブラートフ・ロシア最高会議議長が内閣交代を主張している。ルソコイ副大統領は政策の方向が反対であるとして現内閣を批判つつ、職務にとどまっている。(読売新聞「以下、読売」、920202)

(24)で、前件「いまのところ政府間協定の準備はしていないとする」と後件「共同声明を発表することはあり得る」、(25)で、前件「政策の方向が反対であるとして現内閣を批判する」と後件「職務にとどまっている」というものも、それぞれ前件と後件の間の事柄が一般的に認められた因果関係ではない。それで、(24・25)の「つつ」

5) 近藤泰弘(1988)、「逆接」山口明穂他編「研究資料日本古典文学・(12)文法」、明治書院、pp.212~215

構文は前件と後件の間の事柄が逆接関係になるのである。

#### 4.2 肯定と否定の対立による逆接

- (26) 自伝的小説『あすなろ物語』は、明日は檜になろうと思いつつ、永遠に檜にはなれないという悲しい説話を背負った木に託して、自分自身の半生を劣等感というひとつのモチーフで貫いて小説的に構成したものである。
- (27) この作品(一瞬の夏)は、プロ野球で長島茂雄と競いつつ人気スターになり切れずに消えてしまったE選手の“栄光と悲惨”を追ったものだが、  
(一瞬の夏・解説、p355)

(26・27)での「つつ」構文は、「明日は檜になろうと思いつつ、永遠に檜にはなれない」「プロ野球で長島茂雄と競いつつ人気スターになり切れず----」のように、肯定と否定が対立することによって、前件の事柄と後件の事柄は逆接関係を表している<sup>6)</sup>。前件と後件の事柄が肯定と否定に対立すると、その「つつ」節の意味関係は逆接になる。

#### 4.3 「つつ」節の述語の種類と逆接

ここでは、「つつ」構文で上接する動詞の種類<sup>7)</sup>と逆接関係について調べることにする。2の「つつ」節の述語で、明らかになったように、「つつ」節には状態述語の例は見られないので、状態動詞と第四種の動詞が「つつ」節に上接する場合はないと思われる。

ここでは、「つつ」節に継続動詞と瞬間動詞が上続した場合について、その「つつ」構文の意味関係を検討することにする。

##### 4.3.1 継続動詞

- (28) ばくのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵具箱をカタカタ鳴らしつつ小走り

---

6) 「つつ」節で、形容詞に接続する例は見られないので、否定の「ない」が「つつ」に上接する場合はないだろう。

7) 金田一春彦(1976)、「国語動詞の一分類」「日本語動詞のアスペクト」、むぎ書房、pp7～26。「動詞の種類」とは、金田一の「国語動詞の一分類」での「状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞」のことを意味する。

に道を走った。 (裸の王様、p145)

(29) 一年前の今日十月三日、ベルリンのブランデンブルグ門では花火が打ち上げられ、世界中の祝福を受けつつ、東西両ドイツの統一が実現した。

(産経、991003)

(30) われわれはこの社会の中でおたがいに助け合いつつ、くらしているのです。

(基本語用例事典：637)

(28～30)の「つつ」節の「鳴らす、受ける、助け合う」は継続動詞である。(28)では、動作主体「太郎」が前件「絵具箱をカタカタ鳴らす」と後件「小走りで走る」という二つの動作が同時に行われている。

(29・30)の場合も、前件「受ける、互いに助け合う」と後件「くらしている、実現する」という二つの動作は、それぞれ同時に行われている。

(28～30)のように、「つつ」構文が同時進行をあらわすときは、従属節と主節の動作主体は同一であり、「つつ」節の動詞は「鳴らす、受ける、助け合う」のような継続動詞である。

しかし、次の(31・32)のように、「つつ」構文で動作主体が同一で、継続動詞であっても、逆接になる場合がある。

(31) 外に出せば交雑してしまうので猫にはすまないと思いつつ、室内で飼った。

(毎日、950615)

(32) 自伝的小説「あすなろ物語」は、明日は檜になろうと思いつつ、永遠に檜にはなれないという悲しい説話を背負った木に託して、自分自身の半生を劣等感というひとつのモチーフで貫いて小説的に構成したものである。

「4.1」と「4.2」でも説明したが、(31)の場合は、前件と後件の間の事柄が一般的に認められた因果関係ではないことをあらわしている。(32)の場合は、前件と後件の間の事柄が肯定と否定で対立している。前件と後件の事柄が、一般的に認められた因果関係ではない場合と、肯定と否定で対立している場合は、「つつ」節の動詞が継続動詞であっても、逆接になる。

このように、「つつ」節の動詞が継続動詞である場合、その「つつ」構文の意味は同時進行と逆接の両方になる。

## 4.3.2 瞬間動詞

- (33) 母は食べ盛りの高志のよこしまな行いをいっさいとがめず、げっそり減った釜の飯ならば、「お母ちゃんは、昔もう食べただけ食べてんから、あんたおあがり」自分はひかえて、盗みぐいばれている、自分のために母が食事をぬくと知りつつ、罪悪感が高志にまるでない。(ラ・クンパルシータ、p162)
- (34) 彼らも私と同じように旅の身であった。行きつく所のない道を歩み続けていた。ただ、止まって倒れるのが怖いから歩き続けようと必死にもがいていた。それが果てしない漂泊の旅であり、果てしないあがきであることを知りつつ歩み続ける。(若き数学者のアメリカ、p275)
- (35) 空蟬はこのごろ、物思わしいときが多く、ねむれない夜を送っていた。あの夜、一夜ぎりで源氏を拒絶しつづけ、源氏もあきらめたようなありさまを、ほっとしつつ、それでもいつまでも、あの夜のことが忘れられない。(新源氏物語・上、p28)

(33～35)の「つつ」節の述語「知る<sup>8)</sup>・ほっとする」は、瞬間動詞である。瞬間動詞はその性質のため、時間的幅を持つ意味あいをあらわすことが出来ないのである。

それ故に、(33～35)のように、「つつ」節の述語の動作・作用が瞬間的な動作である場合は、前件と後件の事柄は同時進行ではなく、互いに対立することをあらわすことになる。このように、「つつ」節の動詞が瞬間動詞である場合は、前件と後件の事柄が互いに対立しているので、「つつ」節の前件と後件の意味関係は逆接になると思われる。

しかし、次のように、「つつ」節の動詞が瞬間動詞であっても、逆接にならない場合がある。

- (36) 私は一切の活動がただ私に於て起こることを知っている。私というものは無数の心像がその上に現われては消えつつ様々な悲喜劇を演ずる舞台であるのか。(人生論ノート「個性について」、p139)
- (37) 何にも知らない妻は次の室で無邪気にすやすや寝入っています。私が筆を執ると、一字一劃が出来上がりつつペンの先で鳴っています。私は寧ろ落ち付いた気分で紙に向っているのです。(こころ、p145)

(36・37)の「つつ」構文の場合は、「消える・出来上がる」のように、その「つつ」

8) 「つつ」節の述語が瞬間動詞「知る」である場合は、採集した例文(11例)のすべてが逆接を表している。

節の述語が瞬間動詞でありながら、前件と後件の意味関係は同時進行と解釈される。

(33～35)と(36・37)の「つつ」構文で、異なるところは動作主体の性質である。(36・37)の場合は、「つつ」構文の動作主体が「複数の心像・一字一劃」のように複数である。動作主体が複数であるために、従属節と主節の動作も同じ動作が繰り返されるように見える。ももとは「消える・出来上がる」のような瞬間動詞は時間的幅を持つ意味あいをあらわさないが、その動作主体が複数なので、その動作が反復されているようになる。従って、(36・37)では、「消える・出来上がる」のような瞬間動詞が時間的幅をもつ意味あいをあらわすようになる。

このように、「つつ」節の述語が瞬間動詞であっても、動作主体が複数であれば、その動作が反復するような形になり、「つつ」構文の意味は同時進行のように受け取られると考えられる。

- (38) 言葉は書いた瞬間に過去のものとなっている。それがそれとして意味をもつのは、現在に連なっているからであるが、「現在の私」は絶えず変化しつつ、現在の中、未来の中にあるのだ。  
(二十歳の原点、p187)

(38)も、「つつ」節の「変化する」は瞬間動詞であるが、その「つつ」構文の意味関係は逆接には解釈されない場合である。瞬間動詞「変化する」が「絶えず」という修飾語のため、動作の反復を表すことによって、時間的幅をもつ意味あいをあらわすようになる。

したがって、(38)の構文の前件と後件の間の事柄は、「つつ」節の述語が瞬間動詞でありながらも、逆接には解釈されにくいようである。

## 5、「つつも」

「つつも」は、接続表現「つつ」に取り立て助詞「も」が接続した形である。「つつも」にも「つつ」構文と同じように、同時進行と逆接の用法があるかどうかについて調べることにする。

## 5.1 「つつも」の意味

- (39) 日米自動車・同部品交渉が二十八日合意したことについて欧州連合(EU)側は、二大経済大国の貿易紛争解決を評価しつつも、合意内容が欧州にとって差別的結果をもたらしかねないと強く警戒している。  
(産経・夕、950629)
- (40) 政府は昨年九月の月例で、事実上の景気回復宣言を行ったが、今年三月の急激な円高以降は、基本的な判断は維持しつつも、円高の影響に懸念を示してきた。  
(読売、950629)
- (41) ながい歲月、織田家のために東方の防壁となり、武田氏の西進をささえ、幾度か滅亡の危機に見舞われつつも信長との盟約を裏切ることがなかった家康に対し、信長があたえた報礼はわずか一国であった。  
(国盗り物語 四、p515)

(39)で、前件「貿易紛争解決を評価する」と後件「強く警戒している」は、意味的に対立している事柄である。「つつも」は互いに矛盾した前件と後件の事柄を結ぶ役割をしている。(40・41)でも、前件「基本的な判断は維持する・幾度か滅亡の危機に見舞われる」と後件「円高の影響に懸念を示す・信長との盟約を裏切ることがない」は、それぞれ前件と後件の事柄は矛盾した関係である。

このように、「つつも」構文は、前件と後件の間の事柄が一般的に認められた因果関係ではないことを示しているので、逆接をあらわすことになる。

## 5.2 同時進行と「つつも」

次は、(42～44)の「つつ」構文は、「4.3.1」で同時進行の意味に用いられている例文である。

- (42) ぼくのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵具箱をカタカタ鳴らしつつ小走りに道を走った。
- (43) 一年前の今日十月三日、ベルリンのブランデンブルグ門では花火が打ち上げられ、世界中の祝福を受けつつ、東西両ドイツの統一が実現した。
- (44) われわれはこの社会の中でおたがいに助け合いつつ、くらしているのです。

(42～44)の同時進行の「つつ」を、「つつも」に入れ換えると、

- (42)\*a. ぼくのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵具箱をカタカタ鳴らしつつも小走りに道を走った。
- (43)\*a. 一年前の今日十月三日、ベルリンのブランデンブルグ門では花火が打ち上げられ、世界中の祝福を受けつつも、東西両ドイツの統一が実現した。
- (44)\*a. われわれはこの社会の中でおたがいに助け合いつつも、くらしているのです。

(42a～44a)のように、非文になる。これは「つつも」構文には、同時進行の用法はなく、逆接の意味しかないということを示すことであろう。

### 5.3 逆接と「つつも」

次の(45～47)の「つつ」構文は、「4.1」と「4.2」で逆接の意味に用いられている例文である。

- (45) (ロシアのシラーエフ首相は)訪日の具体的な成果について、いまのところ政府間協定の準備はしてないとつつ、共同声明を発表することはあり得ると述べた。
- (46) エリツィン政権内では、ハズブラートフ・ロシア最高会議議長が内閣交代を主張している。ルツコイ副大統領は政策の方向が反対であるとして現内閣を批判しつつ、職務にとどまっている。
- (47) 自伝的小説「あすなる物語」は、明日は檜になろうと思つつ、永遠に檜にはなれないという悲しい説話を背負った木に託して、自分自身の半生を劣等感というひとつのモチーフで貫いて小説的に構成したものである。

次のように、(45～47)の逆接の「つつ」を、「つつも」に入れ換えてみよう。

- (45)a. (ロシアのシラーエフ首相は)訪日の具体的な成果について、いまのところ政府間協定の準備はしてないとつつも、共同声明を発表することはあり得ると述べた。
- (46)a. エリツィン政権内では、ハズブラートフ・ロシア最高会議議長が内閣交代を主張している。ルツコイ副大統領は政策の方向が反対であるとして現内閣を批判しつつも、職務にとどまっている。
- (47)a. 自伝的小説「あすなる物語」は、明日は檜になろうと思つつも、永遠に檜にはなれないという悲しい説話を背負った木に託して、自分自身の半

生を劣等感というひとつのモチーフで貫いて小説的に構成したものである。

(45a～47a)のように、「つつ」構文が逆接を示しているが、その「つつ」を「つつも」に置き換えても適格文になる。逆接の「つつ」構文は、「つつも」に入れ換えられることによって、逆接の意味がより明確になる。このように、逆接の「つつ」構文は、「つつも」に入れ換えても適格文にある。

#### 5.4 中立的な場合と「つつも」

(48・49)の「つつ」構文は、前件と後件の間の事柄が同時進行と逆接のどちらにも解釈されるような例文である。

- (48) 七三年から八六年までの間、日本は年間三～四％の経済成長を維持し  
つつ世界トップレベルの省エネルギーを達成し、その結果、CO<sub>2</sub>排出量の  
安定化を実現させていたのである。 (日経、920206)
- (49) 京劇が文化大革命中に受けた影響はやはり大きい。---そうした苦難を経  
つつ、京劇のいわば正統を受け継いできたのが梅家の一族だ。  
(朝日・夕、920208)

(48)で、前件「年間三～四％の経済成長を維持する」と後件「世界トップレベルの省エネルギーを達成する」の二つの事柄が同時に行われるようにも思われるし、場合によっては、前件と後件の事柄が矛盾しあう意味関係をなしているようにも解釈される。(49)の「つつ」構文も、前件と後件の事柄の意味関係が同時進行と逆接の両方に解釈されるようである。(48・49)のように、「つつ」構文において、同時進行と逆接の意味は互いに連続することであると思われる。(48・49)の「つつ」構文の意味は同時進行と逆接のどちらにも解釈されるので、前件と後件の間の意味関係は中立的であるとも言えよう。

このように、(48・49)の中立的な例は同時進行と逆接の意味が重なりあうところの意味あいを示している。

(48・49)の中立的な「つつ」を、逆接を示す「つつも」に入れ換えると、

- (48)a. 七三年から八六年までの間、日本は年間三～四％の経済成長を維持し  
つつも世界トップレベルの省エネルギーを達成し、その結果、CO<sub>2</sub>排出量

の安定化を実現させていたのである。

- (49)a. 京劇が文化大革命中に受けた影響はやはり大きい。----そうした苦難を  
経つつも、京劇のいわば正統を受け継いできたのが梅家の一族だ。

のようになる。(48a)では、前件「年間三～四%の経済成長を維持する」と後件「世界トップレベルの省エネルギーを達成する」の二つの事柄は、「つつ」構文から「つつも」構文に変わることによって、前件と後件の事柄が矛盾しあう意味関係がもつとはっきりしたものになる。(49a)の「つつも」構文も前件と後件の事柄が互いに対立することになって、逆接の意味に解釈される。

この場合、「も」は必ずしも逆接の意味を表さない接続表現「つつ」のようなものについて、逆接の意味を明示させるものになる<sup>9)</sup>。つまり、「も」によって取り立てられたものが、後続の述語に対して矛盾する関係にあることを表す<sup>10)</sup>。

従って、「つつも」構文は、前件と後件の間の事柄は逆接しか示さない。

## 6、まとめ

日本語の接続表現「つつ(も)」構文の意味・用法について考察したことをまとめてみると、以下のようになる。

- ① 「つつ」構文の主な用法は同時進行と逆接であるが、それ以外にも漸次進行、継起もある。
- ② 「つつ」節の述語が継続動詞であるとき、前件と後件の間の事柄が互いに矛盾する場合と、肯定と否定で対立している場合は、逆接に解釈される。
- ③ 「つつ」節の動詞が瞬間動詞である場合は、時間的幅を持つ意味あいをおぼわすことができないので、前件と後件の事柄の意味関係は逆接になる。
- ④ 「つつも」構文には、同時進行の用法はなく、取り立て助詞「も」によって、前件と後件の事柄が対立するようになり、逆接に解釈される。
- ⑤ 「つつ」構文における同時進行と逆接は互いに連続するものであり、そのため、同時進行と逆接のどちらにも解釈される中立的な場合が生ずるようになる。

9) 金勝漢(1997)、「ながら(も)の意味・用法について」、「人文科学」(第3集)、제주대학교 인문과학연구소, p136

10) 紙谷栄治(1988)、「係助詞「も」について」、「語文」(50)、大阪大学文学部国文学研究室, p35

## 参考文献

- 渡辺 実(1971)、『国語構文論』、塙書房  
 松村 明(1971)、『日本文法大辞典』、明治書院  
 鈴木 忍(1978)、『文法Ⅰ』、国際交流基金  
 森田良行(1980)、『基礎日本語2』、角川書店  
 寺村秀夫(1984)、『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』、くろしお出版  
 文化庁(1975)、『外国人のための基本語用例辞典』(第二版)、大蔵省印刷局  
 奥津敬一郎(1990)、『いわゆる日本語助詞の研究』、凡人社  
 金田一春彦(1976)、『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房  
 国立国語研究所(1951)、『現代語の助詞・助動詞 一用例と実例一』、秀英出版  
 日本語教育学会編(1982)、『日本語教育事典』、大修館書店  
 益岡隆志・田窪行則(1993)、『基礎日本語文法(改訂版)』、くろしお出版  
 横林宙世・下村彰子(1988)、『接続の表現』、荒竹出版  
 市川 孝(1978)、『国語教育のための文章論概説』、教育出版  
 石黒 圭(1999)、『逆接の基本的性格と表現価値』、『国語学』(198)、日本国語学会  
 奥田靖雄(1985)、『アスペクトの研究をめぐる』、『ことばの研究・序説』、むぎ書房  
 紙谷栄治(1988)、『係助詞「も」について』、『語文』(50)、大阪大学文学部国文学研究室  
 金 勝漢(1997)、『「ながら(も)」の意味・用法について』、『인문학연구』(제3집), 제주  
 대학교 인문과학연구소  
 近藤泰弘(1988)、『逆接』山口明穂他編『研究資料日本古典文学・(12)文法』、明治書  
 院  
 佐藤信夫(1983)、『逆説という修辞現象』中村明編『講座日本語の表現5・日本語の  
 レトリック』、筑摩書房  
 高橋 純(1996)、『「～つつある」について』、『日本語教育』(89)、日本語教育学会  
 中川良雄(1988)、『「ながら」の意味と機能一動作の「並列」を表す場合一』、『研究論叢』  
 (X X X I)、京都外国語大学  
 福島健作(1998)、『ツツアルに関する一考察』、『日本語教育』(97)、日本語教育学会

## 用例出典

- 読売新聞、朝日新聞、日経新聞、産経新聞、毎日新聞  
 大岡昇平、『野火』(新潮文庫)、新潮社、1954  
 司馬遼太郎、『国盗り物語・一・四』(新潮文庫)、新潮社、1971  
 田辺聖子、『新源氏物語・上・中・下』(新潮文庫)、新潮社、1984  
 伊藤左千夫、『野菊の墓』(新潮文庫)、新潮社、1955  
 森鷗外、『高瀬船』(新潮文庫)、新潮社、1968  
 石川淳、『筆手』(新潮文庫)、新潮社、1970  
 塩野七生、『コンスタンティノープルの陥落』(新潮文庫)、新潮社、1991

- 開高健、「パニック、裸の王様」(新潮文庫)、新潮社、1960  
有吉佐和子、「華岡青洲の妻」(新潮文庫)、新潮社、1970  
磯田光一、「解説」水上勉『雁の寺』(新潮文庫)、新潮社、1969  
三木清、「個性について」『人生論ノート』(新潮文庫)、新潮社、1954  
曾野綾子、「太郎物語・高校編」(新潮文庫)、新潮社、1979  
福田宏年、「井上靖 人と作品」井上靖『あすなろ物語』(新潮文庫)、新潮社、1974  
野坂昭如、「ラ・クンバルシート」(新潮文庫)、新潮社、1972  
佐伯彰一、「解説」遠藤周作『沈黙』(新潮文庫)、新潮社、1981  
柳田邦男、「解説」沢木耕太郎『一瞬の夏』(新潮文庫)、新潮社、1984  
藤原正彦、「若き数学者のアメリカ」(新潮文庫)、新潮社、1981  
夏目漱石、「こころ」(新潮文庫)、新潮社、1952  
高野悦子、「二十歳の原点」(新潮文庫)、新潮社、1979